

森岡恭彦編『近代外科の父 パレ』

——日本の外科のルーツを探る——

「私が処置をし、神がこれを癒し給うた」と言う言葉は、いっとはなしに外科医の私の頭の中に残る言葉になっていた。大変な手術のあと、その患者が期待に反して？ 見事に元気になってゆく様にぶつかるたびに、人間の身体って不思議なものだなと感じながら、その言葉を思い出したものである。

この言葉がアンブローズ・パレの言葉であること、そして、そのパレと日本の外科との関わりを教えてくださいましたのは、ある時期、同じ研究室で過ごした私の友人、この本の著者のひとりである大村敏郎氏であった。それがきっかけで医の歴史に興味を持ち始め、忙しい合間に歴史の本を読みふけりながら、こんな楽しみを教えてくださいました友人に感謝しているこのころである。

この本はアンブローズ・パレの没後四〇〇年の記念行事として、森岡恭彦教授が編集し、NHKの出版協会から発刊されたものである。序章、アンブローズ・パレと日本の医学および第一章、わが国の近代外科のルーツをさかのぼる―は大村氏、第二章、パレの同時代を見渡す―は森岡氏、第三章、戦場で学んだ外科医パレ八十年の生涯―は佐野武氏、第四章、後世に残した偉大な業績を再び大村氏が執筆している。

この三人の著者に共通するところは、森岡氏が、「はじめに」

で述べているように、皆外科医で、時期は異なるが三人ともパリに留学している点であるが、それとともに三人ともパレを尊敬し、パレに親しみを感じている人達であることがわかる。この三人がパレの時代、パレの生涯、パレの業績について書いたこの本は実に面白く、読みごたえがある。

歴史上の人物というのは、研究者の切り口、考え方によって、その人物像が大きく変わるのが常であるが、この三人がそれぞれの切り口で書いたパレ像は見事に一致している。したがって、その内容が重複しているところもみられるが、読者にとってその重複が一層パレ像を鮮明にすることに役立っている。

序章と第一章では、アンブローズ・パレの人物像と日本の医学との関わりが述べられ、そのパレが一五七五年にフランス語で書き上げた全集に触れ、それがオランダ医学書となって、どのように日本に伝えられたかを、ミステリーの謎解きのように面白く解説してくれる。その中で、外科医にとっても身近な解説絵図の伝承の意味と重要性を詳細に説明している。

第二章では、パレの生きた時代、戦争に明け暮れたフランス、その王室の変遷、新、旧教徒の争いなどを背景にパレを見つめており、パレと彼の業績を理解しようとするとき、その背景となる時代を理解しなければその偉大さを理解できないことがよくわかる。

第三章では、パレの生涯が克明に記されている。パレが床屋外科医の訓練生としてパリの公立病院オテル・デュニで研修を受けたこと、その後、戦争に行き、多くの患者を前に考え、治療の経

験を重ねたことが業績の大きな源になっていることがわかる。最後に、国王の外科医となっても一般人の治療をつづけたこと、床屋外科医から医師として最高の地位を得たのちまでも続く苦勞のなかで、行われた研究と著作にも触れられている。

第四章では、これらをまとめてパレの業績が解説されている。パレの臨床に関する沢山の業績の中で、鉄砲の創の治療と足の切断に際しての血管結紮は有名である。うっかり読むと、パレがはじめて血管結紮を行ったと思ひ込む人もいられるかもしれないが、血管結紮という方法はすでに七世紀からあり、パレは焼きごてにかわるこの方法の正さを強い抵抗の中で証明し、普及させたわけである。

この本は絵図・写真も多くとても読みやすい。一気に読破できそうであるが、いずれの章も内容が濃く、一行もおろそかに読みとばせない力作であり、読み終わったあと、さわやかな満足感が残る本である。貴重な絵や図はできればカラーにして欲しかったと思うのは、読者の欲張りな望みかもしれない。

編集委員会からこの本の紹介をといわれたとき、ふたつ返事で引き受けたが、改めてこの本を読み、撮っていただいたNHKのビデオをみながら、これは大変なことを引き受けてしまったという思いで、今はすこし後悔している。この分野では素人同様の私がい、この本の内容を正しく紹介するのは、荷が重すぎると感じただからである。言葉の足りなかつた点はさておいて、わが国の外科の原点であるパレについての、この面白い本が、医史学会の人達だけでなく、学生や若い医師達に、さらには一般の人々にも広

く読まれることを期待している。

(山本 修三)

〔日本放送出版協会、一九九〇年、B6判、一九八頁、定価七八〇円〕

茨城県医師会史編纂委員会編

『茨城県医師会史』△昭和戦後編▽

本書は、昭和五十八年発行の『大正編』以降、『昭和戦前編』『昭和戦中終戦編』に続く『戦後編』の第一分冊である。第二、第三分冊は、今後、引続いて刊行される予定になっている。編纂委員会の委員長石島弘氏は、本学会の会員で、外科医であるが、医史学者でもある。

昭和二十年から、昭和四十年までの茨城県医師会史である。本文は、年度ごとの記録、記載になっており、第十九章までの章だてになっている。しかし昭和二十年代から二十二年度までは、敗戦直後の通例で、文書、資料が不足しており、第一章「新生医師会の設立」としてまとめられている。

従来の茨城県医師会は、昭和二十二年六月二十三日に解散し、新生医師会は、同年十一月一日に、法的に成立した。本書の中心は、第二章昭和二十三年度から第十九章昭和四十年までの医師会の活動史である。本書の体裁、内容の配列は、概ね前例にならって構成したとされているが、医師会の会議の議事を克明に記録